副論文 2

要支援の一人暮らし女性高齢者が人との交流を求める構造に関する質的研究

Structure for social interaction required by elderly females who live alone and require support: A qualitative study

野村　健太[*1]，猪股　英輔[*2]，小林　法一[*3]

[*1] 目白大学保健医療学部作業療法学科
[*2] 湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科
[*3] 首都大学東京大学院人間健康科学研究科作業療法科学域

日本保健科学学会誌　第 22 巻 3 号，101-109，2019
2019 年 1 月 21 日受付，2019 年 12 月 25 日掲載
DOI: https://doi.org/10.24531/jhsaiih.22.3_101

要旨

本研究は埼玉県さいたま市岩槻区で一人暮らしをしている要支援の女性高齢者が人との交流を求める構造を明らかにすることを目的とした.要支援の一人暮らし女性高齢者10名を対象に半構造化面接を行い，KJ法に準拠して分析した．その結果，対象となった要支援の一人暮らし女性高齢者は心身に不安を持ちながら生活する中で【工夫できる・できないを一人で判断する】という方略を持ち，その方略が【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】という要因と,【自分の役割を実感したい】という要因を促進･抑制する構造となっていた．この構造を踏まえ，要支援の一人暮らし女性高齢者が自身の役割を実感できるような活動や，人と交流するための方略に支援が必要であることが示唆された.

キーワード：要支援，一人暮らし，女性，高齢者，質的研究

Abstract

This research aimed to determine the structure that elderly females who live alone and require support need for social interaction. We included 10 elderly females who required support and lived alone in Iwatsuki-ward, Saitama Prefecture. Next, we conducted semi-structured interviews and analyzed the collected data according to the KJ method. Results showed that these females had requirements such as “spending valuable time every day for themselves” and “wanting to realize their own role” for them to enjoy interacting with people. These requirements were influenced by a strategy termed “deciding for themselves whether or not they can devise a method on their own.” Hence, incorporating activities that help them realize their roles while respecting their strategies is necessary.

Key words: requiring support, live alone, female, elderly,

qualitative research

I　はじめに

1980 年代の我が国の世帯構造は，三世代世帯が全世帯の約半数を占めていた[1)]が，それ以降，同居家族員が減少し，2015 年には高齢夫婦のみと一人暮らし世帯が過半数を占めるようになった[1)]．2015 年における一人暮らし高齢者の人数は男性約 192 万人，女性約 400 万人，高齢者人口に占める割合は男性 13.3%，女性 21.1%であり，増加し続けている[1)]．増加する一人暮らし高齢者に比例して社会的孤立問題が重度化することが危惧されており，孤立する高齢者の特徴には性差があると言われている．特に男性の方が孤立しやすいという研究が散見される[2)3)]が，女性も支援策を講じる必要がある．例えば小林ら[4)]は，対面・非対面接触とも週 1 回未満(月 2,3 回以下)の場合を「接触なし(孤立)」と定義し，埼玉県和光市の在宅高齢者を対象に孤立者が抱える生活・心理面の課題に関する質問紙調査を行った．その結果，孤立傾向にある一人暮らし男性高齢者 276 人のうち 42.4 %，一人暮らし女性高齢者 672 人のうち 16.5%が孤立状態であり，男性のほうが孤立状態の割合が高いことを明らかにした．しかし，その人数は，男性 117 人，女性 110 人でほぼ同数であり，一人暮らし女性高齢者にも孤立に対する支援が必要と言える．また，日本の女性のライフコースにおいて，「おおよそ 36 年間の結婚生活の後に妻の多くは 72.8 歳で夫を亡くし，平均で 15.2 年の寡婦期間を過ごす」[5)]と言われている．さらに，一人暮らし男性高齢者の貧困率は 60 歳代で 29.2%，70 歳代で 27.8%に対して，一人暮らし女性高齢者は 60 歳代で 41.8%，70 歳代で 46.3%である[6)]．つまり，一人暮らし男性高齢者と比べて一人暮らし女性高齢者は人数が多く，寡婦期間が長く，高い貧困リスクを有していると言える．貧困は主観的健康観やうつ，社会的孤立と関連[7)]することが明らかになっている．このように一人暮らし高齢者は男女ともそれぞれに孤立するリスクを抱

えながら生活をしており[8)9)],地域の中で孤立しないように他者といかに交流を保つかという課題に対して性差を考慮した予防的な支援が必要である[2)10)]．その支援が必要かつ効果的なのは要介護の段階では遅く，要支援の段階が適切だと思われる．また，地域で孤立することには居住地域のソーシャルサポートや慣習等の環境要因によっても左右[11)12)]されるため，特定の地域に住む一人暮らし女性高齢者が人との交流を求める構造を明らかにすることで支援の糸口が見つかると思われる．そこで本研究の目的は，筆頭筆者の所属大学があり，かねてより地域に根付いた活動を行っている埼玉県さいたま市岩槻区（以下，岩槻区）で，要支援の一人暮らしをしている女性高齢者が人との交流を求める構造を明らかにすることとした．本研究の成果は，要支援の一人暮らし女性高齢者に対する交流を促進するための支援に役立てたり，将来的に同地域の一人暮らし男性高齢者と比較し構造の性差を明らかにすることも可能になると思われる．

II　方法

１．研究デザイン

本研究のデザインは個別面接による質的研究とし，質的研究を報告するための統合基準（Consolidated criteria for reporting qualitative research；COREQ）[14)]に従った．

２．対象

対象は岩槻区に在住の 65 歳以上の一人暮らし女性高齢者とした．岩槻区は，鉄道駅周辺は都市近郊の住宅地であり，鉄道から離れた場所に農村部がある．2018 年現在の人口は約 11 万 500 人で高齢化率は 29.7％である[15)]．これは，さいたま市 10 区のうち最も高い数値である．過去 10 年間において高齢者人口および高齢化率は上昇し続けている[16)]．岩槻区の民生委員を対象にした調査研究によると，岩槻区は交通の便が

悪く，高齢者の地域参加を妨げている要因の 1 つになっている[17]と言われている．

対象者の募集方法は目的的サンプリングに従った．人との交流への困難さと一人暮らしの困難さを感じ始めている要支援高齢者を対象とするために，岩槻区内の 3 つの地域包括支援センターから紹介を受けた．対象の条件は戸建てあるいは集合住宅で一人暮らしをしている者，面接が可能な者とし，配偶者が入院・入所中の者は対象外とした．本研究では「一人暮らし」を，世帯を構成する世帯員が一人だけの世帯（単独世帯）[18]と定義する．これらの対象者の条件について予め筆頭筆者が地域包括支援センターの職員に説明する場を設けた．紹介を受けた対象者候補に筆頭筆者が電話にて連絡を取って後日対面し，研究目的，方法，研究倫理等の説明を行い，口頭と書面で同意が得られた者のみ対象とした．なお，本研究は首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理審査委員会（承認番号：17078）および目白大学倫理審査委員会（承認番号：17-050）の承認を受けて実施した．

３．調査方法

面接ガイド（表 1）を使用しながら半構造化面接を行った．面接ガイドは研究目的である人との交流について筆頭筆者が草案を作成後，一人暮らし高齢者に関する先行研究[2)10)11)19)]と照らし合わせて作成した．面接内容は IC レコーダーに録音し，適宜メモを取った．IC レコーダーの音声データは後日文章に起こし逐語録を作成した．面接場所は対象者の都合の良い場所とし，面接は全て男性作業療法士である筆頭筆者が行った．筆頭筆者と対象者は研究の概要を説明する日が初対面であった．面接に先立ち，筆頭筆者はリハビリテーション病院と訪問看護ステーションにて臨床業務を経験した作業療法士であること，現職は作業療法士を養成する大学の教員であること，大学院博士後期課程在学中であること，主な研究テ

ーマが一人暮らし高齢者の社会参加に関する研究であることを伝えた．面接回数は対象者 1 名につき 2 回とし，2 回目の面接の初めに 1 回目の面接内容の確認を行った．2 回の面接の中で基本属性として年齢，一人暮らし歴と一人暮らしになったきっかけ，家族との関係性，要介護度，ADL と IADL，住環境について聴取した．

４．分析方法

分析方法は KJ 法[20]に準拠した．KJ 法を選択した理由は渾沌としたデータを分類ではなく統合し抽象的概念を発想することにより物事の本質を解明することが可能であること，また事象の構造の図示が可能なためである[20]．狭義の KJ 法の手順は，まず逐語録を繰り返し読み，データの本質を記したラベルを作成した．次に，本研究のテーマである一人暮らし女性高齢者の人との交流にとって重要なラベルのみを抽出するために多段ピックアップ技法を用いた．その後ラベルを字づらの類似性や理屈ではなく，本質的な親近性によって統合する表札づくりを行った．その際，たとえ対象者 1 名に由来する 1 枚のラベルであっても無理に統合せず，他のラベルとは異質であり研究目的と照らし合わせて研究者が重要と判断すれば 1 枚のラベルのまま残すよう努めた．この過程は研究者の先入観にとらわれずデータに基づきながら創造的に発想することを可能にする KJ 法に特徴的な技法である．表札を集めて第 2 表札・第 3 表札とグループ編成を行った．空間配置・図解化し，文章化を行った．ラベルや表札はパソコン用ソフトウエアである IdeaFrg2[21]を使用し筆頭筆者 1 人で管理・分析した．その後，KJ 法の研修[22]を修了しその分析手法に精通している共同筆者と筆頭筆者の 3 名で分析の過程をチェックし確実性の確保に努めた．さらに，作業療法士 11 名から構成される大学院のゼミにて協議した．なお，筆頭筆者は過去に健康高齢者 9 名，要支援または要介護の一人暮らし男性高

齢者 11 名[19]，作業療法士 4 名に対して個別面接調査による質的研究を行った経験がある．

III　結果

１．対象者の属性

地域包括支援センターから紹介を受けた 11 名のうち，1 名は面接に対する不安感が強く研究への参加を拒否したため，最終的には 10 名のデータを分析対象とした．面接は 2017 年 8 月 24 日に開始し 2018 年 3 月 6 日に全て終了した（表 2）．面接時間は計 926 分間で，1 回あたりの平均面接時間と標準偏差は 92.6±27.3 分だった．面接場所は対象者の自宅で行ったが，2 名の対象者のみ岩槻区内の地域包括支援センターで行った．面接回数は 1 名のみ体調不良により 2 回目の面接を行えなかった．面接は筆頭筆者と 1 対 1 で行ったが，3 名の対象者のみ紹介者であるケアマネージャーが部分的に同席した．対象者の平均年齢は 83.2±4.5 歳，一人暮らし歴は 15.7±14.1 年であった．対象者の要介護度は要支援 1 または要支援 2 であり，ADL は概ね自立していたが，IADL は 2 名のみ調理や買い物に困難さがあり訪問介護や配食サービスを利用していた．

２．分析結果の概要

分析の結果，総ラベル数は 635 となり，多段ピックアップ技法を行うと 100 ラベルとなった．また，最終表札は 3，第 3 表札は 6，第 2 表札は 13，第 1 表札は 35 となった（表 3）．最終表札を【　】，第 3 表札を≪　≫，第 2 表札を＜　＞，第 1 表札を[　]の記号で示しながら，まず一人暮らし女性高齢者における人との交流を求める構造の要約を述べる（図 1）．一人暮らし女性高齢者は人との交流が生活における楽しみとなっており，【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】という生活基盤を持っていた．この生活の中で【自分の役割を実感

したい】という望みを持っていた．この２つの交流を求める要因は一方が促進・抑制されると他方も促進・抑制されることから，因果関係にある．さらに，この２つの要因を促進する要因は【工夫できる・できないを一人で判断する】の中の≪衰えと交流の危機感を工夫に繋げる≫であり，抑制する要因は≪出かける意欲はあるのに一人では叶わない≫である．つまり，【工夫できる・できないを一人で判断する】は心身に不安を持ちながら生活する要支援の一人暮らし女性高齢者の交流を求める要因に波及する方略である．

次に，最終表札ごとに第２から第３表札の構造を説明する．

３．【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】

(１)≪衣食住に価値を置く≫

生活の基本となる [生活のリズムを整える]ことを重要視し，[健康のために食・睡眠・運動が大事]という意識を持っていた．さらに[整理整頓を心掛ける]ことで家の中の環境を整えていた．これらは＜当たり前の生活に幸せを感じる＞に繋がっていた．つまり，≪衣食住に価値を置く≫は人との交流の基盤となる生活を整えようとする要因である．

(２)≪毎日の生活の中に楽しみを見出す≫

日々の暮らしについて，[一人でも寂しくない]という肯定的な感情と[一人暮らしを楽しむ]ことは＜一人暮らしの自由を楽しむ＞に統合された．日々の人との交流について，[友達の家に遊びに行く][外に出て人と話すことが楽しい][人と会話をすることが重要][人との交流が必要である]は＜人と話すことが必要かつ楽しい＞に統合された．日々の活動について，[一人で行う好きな活動に集中する時間]を持ったり[デイサービスで楽しい活動をする]中で，できないことがあり落ち込んでも[意志を前向きにコントロールする]よう努力していた．これらは＜楽しく前向きに活動する＞に統合された．つまり，≪毎日の生活の中に楽しみを見出す≫は一人暮らし女性高齢

者が毎日を人と交流しながら能動的に楽しく活動しようとする要因である．

４．【自分の役割を実感したい】

(1)≪存在意義を実感したい≫

[積極的にボランティア活動に参加する]ことや[孫の面倒を見るという役割を担う]のような役割を持っていた．また，[人の役に立った経験を誇る]のように過去の役割に自負心を持っていた．しかし，[人の役に立つことができなくなってしまった]と役割を喪失する経験も持っていた．これらは＜人の役に立ちたい＞という望みに統合された．また，人と交流するうえで[老人扱いされたくない]，[自分の居場所が欲しい]という＜自分らしさを守りたい＞という望みを持っていた．つまり，≪存在意義を実感したい≫は一人暮らし女性高齢者が人との交流を通してアイデンティティを守りたいという要因である．

(2)≪人を頼り頼られる≫

別居の家族がいる一人暮らし女性高齢者は[家族を頼る]が，家族が遠方にいたりすぐに頼れない場合もあるため，[近所の人と日々付き合う]ことで[互いに助け合って生活する]近所付き合いをすることが必要であった．また，[街と人が変わりつながりが弱くなった]という地域の変化により，[困ったときに連絡できる人がいる]ことの重要性が増していた．このように一人暮らし女性高齢者は＜家族や近所の人と助け合って生活する＞ことが必要であった．新しい活動に参加する際は＜一人ではなく誰かと一緒に参加したい＞と他者を頼っていた．つまり≪人を頼り頼られる≫は生活を維持するために家族や近所の人と助け合う互助の要因である．

５．【工夫できる・できないを一人で判断する】

(1) ≪衰えと交流の危機感を工夫に繋げる≫

[体が衰えて心配が増える]ことと[衰えに対する危機感を持

つ]という身体的な危機感だけでなく，[近所付き合いに危機感を持つ]という人との交流にも危機感を持っていた．これらは＜衰えと交流に危機感を持つ＞に統合された．この危機感を解決するための方略である[生活を変える必要がある] と[別の活動に変えようと思う]は＜生活を変える工夫をしようと思う＞に統合された．つまり，≪衰えと交流の危機感を工夫に繋げる≫は危機感を解決する方略として人との交流を促進する要因である．

(2) ≪出かける意欲はあるのに一人では叶わない≫

加齢により [移動手段がなく行きたいところに行けない], [屋外歩行が難しくなったので交流が減った], [出かけたいのに出かけられず落ち込む] のように徐々にできないことが増えていた．さらに[お金がなくて出かけられない]のように経済面も影響していた．これらは＜出かけたいのに一人では出かけられない＞に統合され，＜できないと気力が下がる＞につながっていた．つまり，≪出かける意欲はあるのに一人では叶わない≫は一人暮らし女性高齢者の人との交流への要因を抑制する要因である．

IV　考察

1 .本研究の対象者像

対象者の基本属性と表札およびラベルより，本研究の対象者の特徴は岩槻区にて概ね自立して一人暮らしをしているが，年を重ねるにつれ屋外の移動や人との付き合いに制限や不安を抱え始めている要支援の女性高齢者であると言える．要介護になると屋外への移動がさらに制限され，人との交流の制限につながると考えられることから，要支援の段階から人との交流に関する支援をすることが介護予防の観点から重要である．その支援は,【工夫できる･できないを一人で判断する】という方略が【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】と

いう要因と,【自分の役割を実感したい】という要因を促進したり抑制したりする構造に基づいて支援する必要があると考えられる.

２．役割の支援

本研究で明らかになった 3 つの最終表札のうち【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】と【自分の役割を実感したい】は，生活を整えて楽しく暮らし，地域で社会的役割を持ちたいという希望である．これらは高齢者の社会参加において重要[23]とされており，要支援の一人暮らし女性高齢者においても生きる希望と関連する[24]ことが明らかになっている．Fujiwara ら[25]によると，我が国の都市部に住む高齢者において社会的役割における障害は IADL 障害に先行し，IADL 障害を発現する予測因子になることが示唆された．また，高齢者の高次な生活機能は社会的役割から低下する[26]ことからも，高齢者の介護予防において役割の支援は重要である．さらに，役割が果たせるような介入は，生活の満足度の向上と社会的支援および社会活動を改善させたり，従業員，配偶者，親，ボランティア，介護者のような役割への積極的な参加が健康と well-being の維持に関連することが明らかになっている[27]．よって，本研究の対象者のような自分の役割を持つことを望む要支援の一人暮らし女性高齢者に対して，役割が果たせるような支援を行うことで人との交流や生活満足度，社会活動への参加に効果が得られると考えられる．一方で，平野ら[28]は要支援の一人暮らし女性高齢者の社会活動は地域社会のなかで役割を担い積極的に活動していくものではなく，自宅外では自己の目的が明確となった必要性の高いもの，自宅内では身体・認知機能を生かした主体的な活動が望ましいと述べている.【自分の役割を実感したい】という希望のみに着目して地域の役割を担う活動を勧めるのではなく,【自分一人のための価値ある毎日を過ごす】という要因を基盤に価値ある毎

日の中で自分の役割を実感できるような活動を組み込む支援が必要であると考えられる．

３．方略の支援

本研究で明らかになった 3 つの最終表札のうち【工夫できる・できないを一人で判断する】という方略が要支援者の自立支援に重要と思われる．長江ら[29]は「生活の折り合い」概念を明らかにすることを目的に要支援の一人暮らし女性高齢者を対象に面接調査を行った．その結果，「生活の折り合い」概念は「楽しく過ごすが生活信条」「老いに伴う生活調整」「自己尊重感を保証する健康」「生活保障に対する安心感」の 4 つの要因で構成されていることを明らかにした．この中の「老いに伴う生活調整」は自分の生活を工夫したり，自分に合った支援方法を選択して居心地よさを確保すること[29]とされている．これは，自ら生活を変えることを選択するという点で，【工夫できる・できないを一人で判断する】の中の≪衰えと交流の危機感を工夫に繋げる≫と類似している．他にも，一人暮らし高齢者の日常生活動作の不都合に対する対処[30]や一人暮らしを継続している要支援・要介護高齢者の日常生活上の困難に対する対処[31)32]においても道具の使用方法や交通手段，動作方法を試す・工夫する・変更するといった特徴が明らかになっている．よって一人暮らし高齢者において困難に対して工夫するという方略は共通していることがわかる．本研究により要支援の一人暮らし女性高齢者も人との交流を維持する方略を持ち，それは≪衰えと交流の危機感を工夫に繋げる≫であることが新たに明らかになったと考えられる．この方略を支援するには，要支援の一人暮らし女性高齢者が人と交流するための工夫の具体例を支援者が把握し，方略を意識化させたり，根拠を示して強化または修正を図ることが必要であると考えられる．

４．研究の限界

本研究の結果は岩槻区に在住の一人暮らし女性高齢者に対して人との交流について1名につき半構造化面接を2回行い，10名で計926分の音声データに依存するものである．よって明らかになった構造は限定的なものであり，要支援の一人暮らし女性高齢者の一般的な構造を明らかにできたわけではない．さらに，本研究の対象者の一人暮らしのきっかけとその期間や家族との関係性，居住形態などを統制しなかったため，それらの違いによって構造が異なる可能性は否定できない．

文献

1) 内閣府：平成29年版高齢社会白書（全体版）.（オンライン）＜http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_1.html＞（2018年5月3日参照）

2）斉藤雅茂，冷水豊，山口麻衣，他：大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴.社会福祉学 50:110-122,2009.

3) 小笹美子，前童沙也加，當山裕子，他：地域のひとり暮らし後期高齢者の交流頻度．日本看護学会論文集 老年看護 43：94-97，2013.

4) 小林江里香，藤原佳典，深谷太郎，他：孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康　同居者の有無と性別による差異.日本公衆衛生雑誌　58,2011.

5) 三浦文夫：図説高齢白書 2006年度版．全国社会福祉協議会：54-61，東京，2001.

6) 阿部彩：相対的貧困率の動向：2006，2009，2012年　貧困統計ホームページ.（オンライン）＜https://www.hinkonstat.net＞（2018年7月29日参照）

7) 吉井清子，近藤克則，平井寛，他：介護予防に向けた社会疫学的大規模調査 高齢者の心身健康の社会経済格差と地域格差の実態．公衆衛生，69；145-148，2005.

8) Rikke Lund, Charlotte Juul Nilsson, Kirsten Avlund：Can the higher risk of disability onset among older people who live alone be alleviated by strong social relations? A longitudinal study of non-disabled men and women. Age and Ageing, 39, 3(1)：319–326, 2010.
9) 河野あゆみ，田髙悦子，岡本双美子，他：大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析．日本公衆衛生雑誌，56：662-673，2009.
10) 小林江里香，藤原佳典，深谷太郎，他：孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康 同居者の有無と性別による差異．日本公衆衛生雑誌，58：446-456，2011.
11) 田髙悦子，河野あゆみ，国井由生子，他：大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる課題の質的記述的研究．日本地域看護学会誌，15：4-11，2013.
12) 工藤禎子，佐伯和子．引越した高齢者における新たな近隣関係の構築に関する意識と行動．老年看護学，17(1)：37-45，2012.
13) Witkin, B.R., and Altschuld, J.W: Planning and conducting needs assessments: A practical guide, Thousand Oaks, CA: Sage, 1995.
14) 中山健夫，津谷喜一郎：臨床研究と疫学研究のための国際ルール集 Part2：100-107，ライフサイエンス出版，東京，2016.
15) 埼玉県：町(丁)字別人口調査 平成30年1月1日現在 結果報告．（オンライン）＜https://www.pref.saitama.lg.jp/a0206/a009/documents/hyou1-1_3kubun30.xls＞(2018年5月3日参照)
16) さいたま市：岩槻区の人口と高齢化率について．（オンラ

イン）＜http://www.city.saitama.jp/iwatsuki/001/002/009/p046850_d/fil/H28-4-1.pdf＞(2018 年 5 月 3 日参照)
17) 野村健太，石井薫，白石めぐみ，他：さいたま市岩槻区のまちづくりに関する住民のニーズ調査．目白大学健康科学研究，10：17-24，2018.
18) 厚生労働省：平成 27 年 国民生活基礎調査の概況 用語の説明．（オンライン）＜http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/dl/08.pdf＞（2017 年 6 月 12 日参照）
19) 野村健太，會田玉美：訪問サービスを利用する一人暮らし男性高齢者が地域社会から孤立を強めるプロセス．作業療法，35(5)：482-492，2016.
20) 川喜田二郎：続・発想法 KJ 法の展開と応用．中央公論新社，東京，1985， pp247-269.
21) IdeaFrg2（オンライン）＜http://nekomimi.la.coocan.jp/freesoft/ideafrg2.htm＞（2018 年 4 月 15 日参照）
22) 川喜田晶子：霧芯館－ＫＪ法教育・研修－.（オンライン），<http://mushin-kan.jp>（2019 年 5 月 1 日参照）
23) 内閣府：平成 30 年版高齢社会白書（全体版）.（オンライン）＜https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/pdf/2s2s_06.pdf. ＞（2019 年 4 月 11 日参照）
24) 沖中由美：ひとりで暮らす虚弱高齢者の生きる希望に関連する要因．日本看護科学会誌，37：76-85，2017.
25) Fujiwara Y, Shinkai S, Kumagai S, et al: Longitudinal changes in higher-level functional capacity of an older population living in a Japanese urban community. Arch Gerontol Geriatr, 36(2): 141-153, 2003.
26) 成田太一，小林恵子，関奈緒，他：保健福祉サービスを利用していない独居後期高齢者の社会的孤立の実態と孤立移行に関連する要因の検討．新潟大学保健学雑誌，

15(1)：67-77，2018.
27）Ben Heavenm，Laura Je Brown，Martin White, et al.：Supporting Well-Being in Retirement through Meaningful Social Roles: Systematic Review of Intervention Studies. Milbank Q，91(2)：222–287，2013.
28) 平野美千代，佐伯和子，河原加代子：要支援にある独居の前期高齢女性の社会活動の特徴．日本在宅ケア学会誌，14(2)：66-75，2011.
29) 長江弘子，千葉京子，中村美鈴，他：生活障害をもちながら地域で暮らす一人暮らし女性高齢者に関する研究―「生活の折り合い」の概念構造―．日本地域看護学会誌，3：123-130，2001.
30) 山本広美，古川直美，佐藤弘美，他：独居老人の日常生活動作の不都合とその対処方法．川崎市立看護短期大学紀要，5(1)：99-105，2000.
31) 清田明美：独居の生活を継続している要介護後期高齢者の日常生活上の困難と対処．老年看護学，22(2)：79-87，2018.
32) 田中昭子，小西美智子：一人暮らし虚弱高齢者の在宅生活継続の対処方法．老年看護学，8(2)：63-72，2004.

表 1　面接ガイド

項目	質問例
人との交流	現在の生活で近所付き合いや友人など，具体的にどのような付き合いがあるか教えてください 人との交流についてどの程度満足していますか 自治会やボランティアなどの地域での活動へはどの程度参加できていますか
一人暮らしの状況	一人で生活する上で困っていることは何ですか 買い物や外食はどの程度行っていますか
地域の慣習	近所の人との付き合いやすさについて岩槻ならではの特徴はありますか
健康状態	健康状態の変化によって人との交流はどのように変わりましたか

表 2　対象者の基本属性

対象者	年齢(歳代)	一人暮らし 歴(年)	一人暮らし きっかけ	家族との関係(主観)	要介護度	ADL	IADL	住環境	面接時間(分)
A	80	6	夫と死別	子2人と親密，兄弟と疎遠	要支援2	自立	自立	2階建て戸建て(持家)	106
B	80	1	夫と死別	子・兄弟と親密	要支援1	自立	自立	2階建て戸建て(持家)	72
C	80	10	子と別居	子と親密，兄弟と疎遠	要支援1	自立	自立	公営住宅5階	102
D	80	24	子の転勤	子2人と親密	要支援1	自立	自立	集合住宅(持家)	106
E	80	1	夫と死別	子と親近，兄弟と疎遠	要支援1	自立	自立	戸建て平屋(持家)	100
F	80	38	離婚	子2人・孫・兄弟と疎遠	要支援1	自立	自立	集合住宅1階(賃貸)	128
G	70	11	夫と死別	子・兄弟と親密	要支援2	自立	自立	集合住宅5階(持家)	131
H	70	40	親と別居	兄弟と疎遠，その他の親族と親密	要支援2	自立	全般的に一部介助	戸建て平屋(賃貸)	55
I	60	2	夫と死別	子と親密	要支援2	自立	自立	集合住宅(賃貸)1階	45
J	90	24	夫と死別	子・孫・兄弟と親密	要支援1	自立	通院に一部介助	2階建て戸建て(持家)	81
平均	83.2歳	15.7						合計	926.0
標準偏差	4.5	14.1						平均	92.6
								標準偏差	27.3

表 3　表札とラベル一覧

最終表札	第 3 表札	第 2 表札	第 1 表札	ラベルの一例
自分の役割を実感したい	人を頼り頼られる	家族や近所の人と助け合って生活する	互いに助け合って生活する	団地の人に助けられながらなんとか生活している
			困ったときに連絡できる人がいる	お互い困ったときに頼りあう人がいる
			街と人が変わりつながりが弱くなった	昔は友達がいたけど，町が変わるにしたがっていなくなったのは寂しい
			家族を頼る	一人が嫌になると娘にお願いして家に行かせてもらう
			近所の人と日々付き合う	新聞の広告をあげに隣の家に 1 日 1 回は行く
		一人ではなく誰かと一緒に参加したい	一人ではなく誰かと一緒に参加したい	自分から始める意欲はないが，他力本願で何かしらの会に参加したい
	存在意義を実感したい	自分らしさを守りたい	老人扱いされたくない	デイサービスに行くと自分が年寄り扱い・病人扱いされるのが嫌
			自分の居場所が欲しい	高齢者が気軽に通える場所が少ない
		人の役に立ちたい	人の役に立った経験を誇る	老人会とマンションの役員でいろんな人とつながった
			積極的にボランティア活動に参加する	高齢者の健康教室ボランティアで食事を作る
			人の役に立つことができなくなってしまった	助けてもらうばかりでもう人の役に立てない
			孫の面倒を見る役割を担う	孫が一人になるときは自分がただいるだけでも娘が安心する
自分一人のための価値ある毎日を過ごす	衣食住に価値を置く	当たり前に幸せを感じる	当たり前の生活に幸せを感じる	忘れっぽくなっても一人で生活来ているのは幸せなことだと思う
		衣食住を整える	生活のリズムを整える	写真教室があるからサイクルが回っている
			健康のために食・睡眠・運動が大事	栄養・睡眠・運動して寿命ある間生きなければならない
			整理整頓を心掛ける	物の置き場や掃除の方法など自分が生活しやすい様式にする

	毎日の生活の中に楽しみを見出す	一人暮らしの自由を楽しむ	一人でも寂しくない	一人に慣れてしまい，全く寂しくない
			一人暮らしを楽しむ	一人で生活しているのが楽しいし満足している
		人と話すことが必要かつ楽しい	人との交流が必要である	食事を作って食べてテレビ見て昼寝するのが全て一人という生活は嫌になる
			友達の家に遊びに行く	午前中は毎日友達に会いに行って遊んでいる
			外に出て人と話すことが楽しい	散歩しながら店をのぞいたり農家の人と交流したりするのが楽しい
			人と会話をすることが重要	年をとっても知らない知識で驚いたりするので会話は重要
		楽しく前向きに活動する	一人で行う好きな活動に集中する時間	台所仕事をするときは一生懸命集中して何もかも忘れる
			デイサービスで楽しい活動をする	デイサービスでのカラオケは楽しい
			意志を前向きにコントロールする	失敗したり人に迷惑かけるかもしれないが，やろうという気持ちは大切にしている
工夫できる・できないを一人で判断する	衰えと交流の危機感を工夫に繋げる	衰えと交流に危機感を持つ	衰えに対する危機感を持つ	人に迷惑をかけないようになるべく自分で何でも行う
			体が衰えて心配が増える	転倒に対して心が心配症になった
			近所付き合いに危機感を持つ	退職後の不安を感じ，地域に密着したいと思うようになった
		生活を変える工夫をしようと思う	別の活動に変えようと思う	10年続けた写真は一区切りにして，何か別のことをやろうと思う
			生活を変える必要がある	臆病な性格が生活改善に役立っている
	出かける意欲はあるのに一人では叶わない	できないと気力が下がる	できないと気力が下がる	したいことがうまくできないと何にもやりたくなくなる
		出かけた人のいでは出かけられない	移動手段がなく行きたいところに行けない	行事のある土日はコミュニティバスが休みなので参加できない
			屋外歩行が難しくなったので交流が減った	歩けるときと比べて交流がなくなってしまった
			出かけたいのに出かけられず落ち込む	外に出る機会がないからうつっぽくなりそう
			お金がなくて出かけられない	会費のある集まりにはなかなか行けない

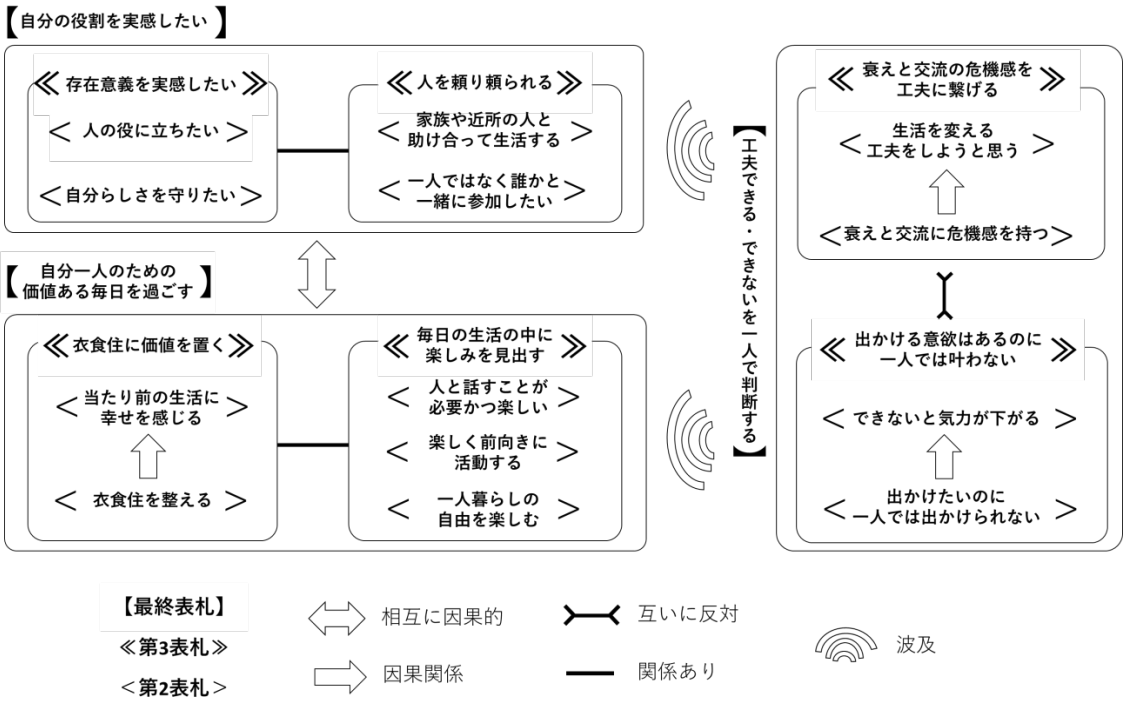

図 1　要支援の一人暮らし女性高齢者が人との交流を求める構造

左側の 2 つの最終表札は生活を整えて楽しく暮らし，地域で社会的役割を持ちたいという希望であり，右側の 1 つの最終表札はその希望に波及する生活上の方略である．